

私の授業改善

— 教養科目 歴史学C I（日本史）の場合 —

人文学部 小林 昌 二

A Report on Historical Studies in the General Culture

Shoji KOBAYASHI (Faculty of Humanities)

It has been our problem, how to teach history in the general culture. And so, I attempted to improve my teaching method which was adopted the CIMAL on historical studies. As it was possible for students to write their name and some questions on a card, it was very effective for the students to study and for me to teach. Because I could answer their questions at the next time, and the students were interesting in my answer. While I could know who had been attendance. In this trial I have felt that the students have a lot of questions.

Key words: Improvement of teaching, CIMAL, Attendance card, History for general education, Communicative method.

I はじめに

小稿は、1994年度前期に行なった新潟大学における標記の拙い授業の実践報告である。その拙い授業には反省すべきことがもとより少なくないが、その失敗を次年度以降の授業に生かして改善をはかるためには、単なる技術的な改善ではすまない、学生の勉学意欲の実態理解や、これにどこまで働きかけるべきかなどの教育目標と関わる問題が少なくないだけに、大教センター第2回ワークショップで報告したものである。

なお、「授業改善」とは、もとより授業内容の改善を含むものであろうが、ここではそこには及ばない「授業の形態・形式」の改善の意味に限定して用いたい。大方のご批判やご教示を頂ければ幸甚に思う次第である。

II 標記授業の前提

学ぶ主体の意欲、教師の熱意、そして両者を結ぶ教

育の方法が授業を成立させる、という。ここではそうした授業成立の関わる前提についてふれておきたい。

数年前、人文学部の学務委員として入学式翌日の1年生ガイダンスを行なったとき、入学当初の1年生の眼は、輝いているのを確かに見た。その輝きは今も好奇心と意欲によるとおもっている。この輝きは、いつまでももつはずのものではないが、好奇心と意欲とをどのように発展させるかが、教養教育科目のなかではとくに重要であると考ええる。

① 標記の授業は、講義形式で、当初聴講定員を150人としていた。だが当初459人の希望者（後に聴講を取り消したものだ51名）がおり、教室変更をして全員を受け入れた。

この経緯は幾分のアクシデントであった。最初の授業にでかけるに当たって、聴講希望者がどれくらいかなど全く考えていなかった。教室の番号を数えながら廊下を辿っていくと、学生が沢山居て、廊下に何でたむろしているのか不愉快な思いがしたが、それが私が行くべき番号の教室から発生しているこ

とに気づくのにそれほど時間はかからなかった。

まず、抽選をしなければ、とにかくあふれた学生も入れる教室を、と思って慌てて企画室に戻った。あわてていたためか250人の教室を宛がってもらい、クジを作ってもらうことにして、時間稼ぎのための話を考えながら戻って、教室移動を申し渡して移動した。移動してみたら、その教室も入りきれずに廊下にあふれたことには、一体何人いるんだろうかと驚愕した。今度は心配をしてついてきた企画室の職員が、大講義室が空いていますよ、との言葉に助けられ、再度の指示で移動し、落ち着いたときにはもう後のことまで考えて抽選する元気を失っていた。

しかしなぜ、こうした予定変更の冒険をしたかといえば、以前、学部の学務委員であった時、教養部の抽選制は学生に評判が悪いと聞かされていた。そして前年に、はじめて1年生の人文演習を担当し、一人の受講生が10回も抽選漏れになって意欲をひどくそがれたといい、そこに居た他の受講生たちも声を揃えて、意欲をそがれる、といったのを聞いてもっともなことだと思ったことを思い出したからである。

むろんこうした変更の教育的な是非については、すでに教養部時代に議論ずみのことであったかもしれないが、それを承知していなかったのは怠慢のせしりを免れない。この問題は、むろん議論の末に判断すべき事柄であったかとも思うが、その議論にはそうした学生の声も組み込まれる必要がある。そして今は、そうした議論の場が、ワークショップの場しかないことを心に銘記しておきたい。

- ② 新潟大学での教養科目の講義担当は私にとって初めてだったが、これまで前任校の愛媛大や最近の長岡技科大等で教養科目を担当したことはあった。その場合に、教養科目歴史（日本史）の目標をどこに置くかなど、いつもいろいろに迷い、いまだに確信はない。専門教育の興味は、専門家の専門的なそれがなぜどのような意味において興味深いものであるかを明確にすることでよいと思うが、教養科目のそれも同じであるのか、違うのか。違うとすれば一体どこにその相違があるというのか、学会のテーマなどからは直接に見当がつかない問題のように思われる。一般教育学会（現在は大学教育学会）のあるこ

とは承知していたが、そこでどのような論議が交わされてきたのか知りたくは思ったが、日頃の怠惰のために今は手遅れとなった。

- ③ 人文学部での歴史の専門学生の授業についてはレジュメを配布することにし、その内容の良し悪しを絶えず気に掛けている以外に、授業改善などを意識したことはこれまでにない。専門の授業の形式には教育的配慮の余地はあまりあるとはいえない。これに対して授業改善が意識的に必要なものとして、かならずしも意欲があるといえない受講生に対しても、一定の教育効果を上げなければならない場合であろう。

そうしたものとして、これまでに意識して授業改善を試みたことがあったのは、前任の愛媛大教育学部での、小学校課程学生の専門科目社会（日本史）である。そこでは歴史分野で専門科目2単位を取得するのが小学校教員免許の条件である。したがって大学では歴史分野の2単位を修得すれば、これで6年生の社会科歴史分野の担当が可能となるわけである。そこでも迷ったが、そのときの結論は「歴史を書く」経験を目標に15コマの授業内容を構成したことであった「小学校課程学生にたいする日本史専門授業内容試案」（『社会科』学研究第2号、1981年）。

やはり今回の教養科目の授業の目標についても、学生自身が、授業で興味と関心を発展させ、自分のテーマを見つけて「歴史を書く」経験をさせることに目標をおくことにした。むろんこれが適切かどうか問題であるし、その場合、そのための各授業の構成と内容も問題となろうが、ここでは授業形態の改善に問題を絞っておきたい。

III 授業形態の改善点について

- (1) 1～2割の熱心な学生が理解できればよいというのではなく、8～9割の学生が理解できる内容であることを目指すことにおいた。したがってテーマについて、授業者の専門（日本古代史）の条件を生かしたテーマ性ととともに、理系学生も興味をもって歴史の理解を深めることができるよう考えたことや、高校日本史を履修していない者をも考慮したつもり

である。

そのテーマと概要は以下の【資料1】のとおりであったが、実際には準備や授業時数の不足（4月14日は内容に殆ど入れなかったこと、4月28日が研究上の資料調査のために申し込んでいた東大寺図書館の閲覧許可が当日となったために、また9月22日翌日からの学会開催の準備のために、2回休講した結果授業時数は13回）によって*印の第7、12、14回を省略した。そのため、もとより薄い近世、近代の新しい時代がなお薄くなってしまったことになった。

【資料1】

'94年度 教養科目 人文系

歴史学C I（日本史）講義概要

クニの語は、今日、なぜ国家と出身地、故郷とを連想させるのか。むろん列島の国家や地域の長い歴史が関係する。講義は、クニ・サト・ムラの起源について古代史料や吉野ケ里遺跡等の考古資料によって尋ね、サト・ムラが、どうして国に重なり、国家へと拡大連想するのか、国家に短絡しがちな現代の自己認識に歴史的にアプローチする。

第1回 はじめに ―クニの語義をめぐって―

第2回 中国古代文献に見る倭国の国と吉野ケ里遺跡などに見えるクニ

第3回 古墳時代の展開
―クニヌシ クニノミヤツコ
―国主から国造へ―

第4回 「村」用語の系譜と異同
―中国・朝鮮そして日本―

第5回 古代の組織された国家・国と郷里

第6回 古代末期の反乱

第7回 *過渡期王朝国家下の荘園の村

第8回 権門・顕密体制論

第9回 双頭の政治と内乱

第10回 天下布武

第11回 平和令

第12回 *御公儀の町と村と浦

第13回 維新の変革と復古
―高天原からの万世一系―

第14回 *近代企業の家族主義と家族国家観

第15回 現代の起点 ―サザエの死と天皇制―

(2) とにかく400人を超える聴講希望者がいるため、出

席をとることをどうするか、私語をどう戒めるかなど、悩ましい問題が予想された。幸い坂東昌子氏の「多人数講義でのコミュニケーションの試み」（『大学再生の条件』1991年）を読んで感心し、このシーマル（CIMAL）という形式を取り入れた。氏の500人規模の愛知大学での教養科目「自然科学概論」「物理」での、真面目な「文系に物理を教える」とか、「教えながら教えられながら」といった重要な点もさることながら、私語をさせない秘密兵器で、また出席もあわせて取れる点から、ぜひこれをやろうと考え、実施した。

私語をさせない秘密兵器というのは、前時の質問感想を、名前入りで読み上げて、答えるという受講者に緊張を与える方式であるからである。そのためには全員が何らかの内容を名前とともに記入してあることが前提となる。そこで次のような「出席カード」と称したものを、授業の前に配り、名前を書かせ、授業に出ていて感想がないはずはないから、感想だけは必ず書くように、書いてないものは出席と見なさない、とした。

実際に名前を読み上げて回答をやってみたら、そのときはさすがに黙っていた。が、早速に次の「出席カード」には抗議の声が多数寄せられた。次の時間にこのことを公表し、名前を読み上げるときは、質問欄に記入のあるものに限ると答え、譲歩することにした。こうしたやり取り自体に受講生諸君との対話があることを実感した。

370～80人の「出席カード」が、毎時間あったが、読むのに2～3時間を要したものの授業の手ごたえを察することができて、退屈することはなく、なんとか続けることができた。とにかく数が多いので回答すべき質問には、付箋をつけて次の授業の初めに10～15分程度を使って読み上げ回答をした。するとまたこれに対し、とりわけ同じ受講生が様々に理解したり、考えていたりして興味深いという感想や、また回答への質問が寄せられたりして、概して好評であったが、回答時間がやや長くなるとすぐに長すぎるとの感想が増えた。むろんつまらない質問に時間を取るな、という注意も再三ではなかったほどだ。

質問と回答を印刷して配布することもないわ

けではなかったが、多人数のために負担が大きく無理であった。人前で自分をさらすことを嫌う（私も同じであるが）学生諸君に、質問はありませんか、と口頭で問い、挙手がなければ質問がないというのは、全くの形式にすぎず、およそ3人に1人は強制ではない質問の欄に、真面目に質問を書いている事実にはあらためて驚かされた。このシャイで控え目な学生の実態をどう考えるべきか、大きな問題であると思われる。シーマルの形式を支えた「出席カード」は【資料2】のとおりである。そこにおける読書の勧めも文科系科目の課題と考えたものである。

【資料2】

'94年度歴史学（日本史）第 回

出 席 カ ー ド

NAME _____

学 年 _____ 学 部 _____

在籍番号 _____

質 問 欄

感 想 欄

（必ず書いてくださいネ）

この一週間に読んだ本

（ただし、漫画や週刊誌は除く）

（推薦します。ルース・ベネディクト著『菊と刀』教養文庫、アメリカ女性の日本人研究があなたのこころにくだります。）

(3) 成績の評価は、結果として【資料3】のようにレポートと出席とで行なった。だが初めから決めていたのではなく、この結論にいたるまで試験、ミニテストなどをどうするか随分と迷っていたため、しばらく決めかねていた。受講生からはどうなるのか不安であると矢のような催促があったため、3回目から授業内容における個々の知識ではなく、授業より得られた関心や心に残ったことからテーマを見つけ、その歴史を書くことを告知して、夏休みを利用することを提起し、夏休み前と夏休み後に次の資料3を2度配布した。

【資料3】

【評価＝レポートに関するアナウンス】

- ① 評価は、レポート提出に、出席等を加味して行なう。
- ② 提出資格は、授業予定回数13回の3分2以上＝8回以上出席していること。
- ③ レポートのテーマは、「本講義の内容について、直接・間接を問わず、最も心に残った歴史的事象や歴史理解に関するもの」であること。

事例1 古代の人名や地名について述べていたが、自分の「山辺」の姓が気懸りになったので、ルーツを検討し、それが山部にとどまらない様子が理解できた。

事例2 埴輪芸能論では、埴輪のとぼけた表情まで論じられていないので、これに取り組み、縄文時代の土偶にも似た問題のあることが今後の問題に残った。

事例3 昭和59年まで1万円札などに使われた聖徳太子像は、太子ではない、という今枝愛真説を検討した武田佐知子著『信仰の王権聖徳太子』（中公新書）を読んで、歴史と研究の積み重なりが現代を左右している一面を書く。

事例4 司馬遼太郎『国盗物語』の信長の性格に興味深く読んだ。授業のそれと相違し、違いが何処にあるか吟味し、歴史小説と歴史学との相違を考えてみた。

事例5 村の歴史、祖母の歴史、家の歴史など小さな歴史に、戦争や不況・災害などの大

きな歴史が関わっていたが、大きな歴史に負けない努力や運動を探り、受け身でない人々の主体的な営みを発見した。

事例6 地域の遺跡や文化財を直接見て歩き、特に印象深かった山城^{ヤマジロ}の歴史についてそれが本来の軍事的機能の城であることが分かり、以後近世の「お城」に発達していく歴史を検討した。

- ④ 枚数は、本文400字詰原稿用紙で3～5枚。
ワープロ原稿も可。付録資料は枚数制限なし。
- ⑤ 提出期限は、9月8日(木)15時。
- ⑥ 提出場所は、企画室教務係、又9月8日(木)の授業終了時、担当教官に提出。

(4) 単調となった授業の形態からの転換を試みたのは第9回の「双頭の政治と内乱」(6月23日)からである。

歴史の舞台に民衆が登場するところでは「大田植え」(ほかに越後ゴゼ)の映像(ビデオ)を15分程度用い、好評を博した。この成功で小生もこの辺りでノリが出てきた。

第10回「天下布武」(信長論)でも引き続き「幸若舞」のビデオを見せて「敦盛」の話に続けようとした。しかし、あるはずのこの巻が見当たらず、では、というので大道芸の巻を見せて脱線し、テキヤの話を入れてうけた気でいたら、つなぎで見せた「人間ポンプ」が、バカうけであったことが感想からわかり、ひどいズレを感じさせられたことがあった。

第12回目(9月1日)には、客員研究員・オハイオ州立大学准教授フィリップ・ブラウン先生に「アメリカにおける教養日本史教育」を30分話してもらった。感想には、英語がわかるかどうかドキドキしていたら立派な日本語の話でホットしたなどもあったが、今学んでいることとの比較が考えられて有意義であったとする感想が圧倒的で、暑い午後3限の睡魔も遠のいたようであった。

IV 授業の経験から

- (1) 最後の授業で、出席カードの感想欄の一部を使って次の【資料4】のアンケートをとった。その結果を、文系(人文・法・経・教育)、理系(理・工・農・

歯)、全体、の3つにわけて記した。

【資料4】括弧はコメント欄

II. 歴史学(日本史)C I について、以下、5段階評定に○印をして下さい。

- ① 授業内容は、新鮮であったか。()

	文系	理系	全体
5	50	22	72
4	136	29	165
3	65	23	88
2	12	3	15
1	1	0	1
計	264	77	341

- ② 授業内容に興味をもてたか。()

	文系	理系	全体
5	61	15	76
4	128	33	161
3	64	24	88
2	12	4	16
1	1	1	2
計	266	77	343

- ③ 授業から学ぶ刺激を受けたか。()

	文系	理系	全体
5	40	13	53
4	92	23	115
3	108	34	142
2	21	6	27
1	2	2	4
計	263	78	341

- ④ 授業は、熱心に行なわれたか。()

	文系	理系	全体
5	98	22	120
4	100	34	134
3	60	16	76
2	5	5	10
1	1	0	1
計	264	77	341

- ⑤ 授業方法に工夫があったか。()

	文系	理系	全体
5	57	14	71
4	93	25	118
3	92	31	123
2	20	5	25
1	0	0	0
計	88	75	337

以上の結果から簡単なコメントをしておきたい。

まず第1に、④の「授業は、熱心に行なわれたか。」において評価5・4をあわせて74.5%を得られたことが、何よりの労苦にたいする酬いとして嬉しいことであった。

だが第2に、③の「授業から学ぶ刺激を受けたか。」における評価5・4が49.3%弱にとどまって半数に及ばなかったことは、明らかに授業内容にエキサイティングな刺激が欠如していたものとして反省が求められているといえよう。

第3に、⑤の「授業方法に工夫があったか。」における評価3・2としたものが、43.9%あって、約半数ほどのものが必ずしも授業方法に工夫があったと理解していないことがわかった。授業を担当した私としては工夫をしたつもりであったが、そんなことは当然と、見過ごすものの少なくないことを示している。むろん工夫の成功の程度が関係しているのかもしれないが、このようなズレについては、いつも心して置くべきこととして自戒をしたい。

なお文系と理系のデーターの相違も若干見られるが細部にわたるので割愛する。

(2) いくつかの感想

最後に、教養科目講義を初めて体験をしてみてもわたしの感想と成績評価【資料5】とを記すことを許されたい。

- ① 講演会の講師を毎週引き受けて務めているようなものだ、というのが率直な感想である。外でやる講演には準備に時間を掛けるもので、とても内輪でやっている専門の授業どころではない緊張を強いられた。専門の授業の手抜きをしてでもの思いで、また後わずかだとの思いで毎回取り組んだ。
- ② レジュメや出席カードの配布だけでも持ち切れないほどで、ゼミの学生を同行して手伝わせた。その印刷、ビデオ機器の運搬など職員の皆さんの援助なしには到底できるものではない。出席

カードを370～80名分を読むのに2～3時間を要したが、これは楽しく、有益であったことはすでに述べたが、カード整理と出席簿への転記には、手が回らず、学生アルバイトなどを要したことを率直に記しておこう。

- ③ 教育目標からいっても、当然にレポート評価の事後指導が必要であるが、人数の点から見て、教員一人の力では不可能である。教育目標に無理があるのかもしれないが、多人数教育において効果を挙げようとすれば、ティーチング・アシスタントは不可欠であることを痛感させられた。そうした制度的保障が、今はまことに不備であって、後追いなのかどうかさえ定かではない。教育目標をたてても、それを追求できる条件がいつまでも整わないと、いずれ熱意は失望に変わり、教育改善の試みも形骸化するであろうことが脳裏を横切っていく。

眼を輝かせて沢山の新生が入塾してくれただが、どれだけ彼らの期待に応えられたか、アンケートの結果から反省もしている。また内容を斬新にして、心新たに来年度の授業に取り組みたい。

【資料5】

	聴講希望	取消	優	良	可	不可 評価せず
人文	59	4	31	20	1	3
教育	104	14	23	60	1	5
法学	70	6	18	30	10	6
経済	131	18	24	52	17	18
理学	24	2	6	8	5	3
歯学	6	0	2	4	0	0
工学	47	2	16	23	5	1
農学	18	5	2	7	2	2
全体	459	51	122	204	41	38
%		/	30	50	10	10